はじめに

前巻の執筆からまた一年が過ぎた。この一年、いろいろなことがあった。

読者のみなさんにも、きっと、いろいろなことがあったにちがいない。「大変だけど、頑張ろう」という気持ちでいてくださることを願うばかりである（最近、ツイッターやフェイスブックで、「本、読んでいます」というコメントをくださる方がたくさんいて……、文章に親近感のようなものがまじってしまう）。

今回の「はじめに」は、本文と同じくらい、**私が「書きたい！」と思うこと**の〝はじまりの部分〟だけを書かせていただくことにした。〝はじまりの部分〟が、本書の「はじめに」として本文を盛り上げてくれると思うからだ。そう、本書の「はじめに」にふさわしいのだ（**なぜふさわしいのか？**　など、詳しいことは考えないでいただきたい）。

私が「書きたい！」と思うことは、〝失敗〟だらけの私の生活のなかにあって、**ポツン、ポツンと元気をくれる出来事**だ。生物や学生たちをめぐる動物行動学的な出来事といってもいいだろう。そんな出来事のなかから読者のみなさんのために特によりすぐったものなのである。

ちなみに、最近は、先生！シリーズの本が出版されるのは四～五月で、原稿を完成させるのは一二月ごろだが、今回は事情があって一〇月初めに原稿を完成させた。そして、この「はじめに」を一〇月半ばに書きはじめた。そう、今は一〇月なのだ。

そして〝はじまりの部分〟の事件は、二〇一九年も終盤にさしかかった九月に起こり、今も続いている。

九月のはじめ、私は、鳥取市智頭町芦津（ちづちょうあしづ）のニホンモモンガの森に来ていた。

約一週間後に迫ったゼミの合宿の下見である（それと実験が終わったモモンガを放し、新しいモモンガを連れて帰るという目的もあった。もちろん、捕獲・飼育許可はとっている）。

ある調査区域の巣箱をチェックしていたときだった。巣箱の蓋をゆっくり、少しだけ開けたら、たくさんの巣材が詰まっており、そのなかからモモンガがヌッと顔を出したのである。な

にか眠そうな、ぼんやりした顔のモモンガだった。

私はパタッと蓋を閉じ、巣箱ごとケージに入れて大学へ連れて帰った。

悲劇は、それから約一週間後、ちょうど合宿に出発する日の朝、**突然やって来た。**

早朝、飼育室に行くと、それまで元気だったモモンガがケージのなかで、巣箱から外に出てうつ伏せになって死んでいたのだ。

私は呆然と立ちつくした。

なんで!?

そんな悲劇、それまで経験したことはなかった。

そして異変にすぐ気がついた。……エアコンが止まっていたのだ。ということは、前の晩は飼育室のエアコンが切れていたということか。夜の暑さに耐えきれず死んだ可能性がある。ただし、それに加えて、もう一つ原因と考えられることがあった（それはあとでお話しする）。

事前に告知されていたエアコン取替工事のことを忘れていた私の失敗である可能性が高い。

いずれにしろモモンガは死んだ。なんとも申し訳ない、沈んだ気持ちでモモンガを山に埋めてやった。

それから数時間後、学生たちが集まってきて、荷物を車に積みはじめた。

私は、学生たちには〝悲劇〟のことは言わず、合宿へと出発した。

合宿は充実したものだった。学術的にも、エンタメ的にも面白い事件もあった。その話はいつかまたお話しすることもあると思うが、今は、合宿から帰ってきてからのことだ。

一泊の合宿から帰ってきた次の日の朝、私は急いで大学に向かった。

朝起きたとき、**ある考えが頭に浮かび**（ほんとうだ！）、いても立ってもいられない気持ちになったのだ。

その考えというのは、こうだ。

「ひょっとしたら死んだモモンガは雌で、子育て中だったのかもしれない」

巣箱のなかに、巣材があんなにたくさん集められていた理由（母モモンガが採食で外出した

ときの子どもたちの保温のため）。（可能性だが）暑さに弱かった理由（授乳により母モモンガが体力を消耗していた）。巣箱から出て死んでいた理由（少しでも温度が低いところに移動した）。そんなことが説明できるような気もしたのだ。そして、季節的には、（出産時期が早春と夏であることから考えて）子育てをしていてもおかしくない。そしてなにより、私が、（もう一回言うが）私が直感的に感じたことだ。私くらいの研究者が直感的に感じたことならそれはきっと、無意識のうちにとてもとても鋭い内容に反応しているにちがいない。

だんだんと、（半分）妄想は増大し、ほんとうに巣箱のなかに子どもがいるような気分になって車を走らせたのだった。そして、もちろん大きな問題も認識していた。

仮に、巣箱のなかに子どもがいたとしても、空腹やのどの渇き、暑さで死んでいるかもしれない。

大学に着いて飼育室に行き、巣箱のなかを探ってみたら、**驚くなかれ！　ほんとうにいたのだ。**それも生きていたのだ！　三匹の子モモンガが！

私は、驚くと同時に、よくぞ生きていてくれた、母親へのせめてもの供養ができると思った。

そして、そこから**私の戦いが始まった。**

野生動物の子どもだ。一般的に、母親の飼育行動は（かなりな部分本能的に）とても巧みに、子どもの成長に必要な、栄養、外的刺激などを与える要素をシステムとして備えている。ヒトが育てる場合、それらの必要物をある程度以上満たさないと子どもは育たない。

これは**ほかの人にはまかせられない。**仕事と両立させて、なんとしても、巣立ちの時期まで育て上げ、母親がいた森に放してやらなければならない、と思ったのだ（それが結果としてニホンモモンガの動物学的習性の理解の深化につながる、という気持ちも、頭の片隅にあったことは白状しておかなければならないだろう）。

幸いにして、推定、生後一カ月半ほどで、目

ゼミ合宿からもどった翌朝、巣箱のなかを探ってみると、3匹の子モモンガがいた！　これはなんとしても巣立ちの時期まで育て上げなくては

も開いて体力もありそうな子どもたちだった。

水を与え、ミルク（これも私の直感と経験で、ヒトの赤ちゃん用の粉ミルク）を温かい湯に溶かして与えた。

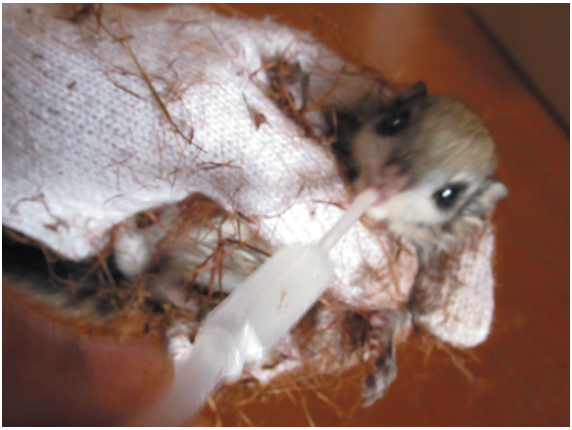
子モモンガたちは、ミルクを入れたスポイトに飛びつくようにして**飲んだ、飲んだ、飲んだ、飲んだ。**

当然だ。丸一日以上、水分をとっていなかったのだから。

それでも三匹とも、少なくとも外見上は元気そうだ。

ちなみに、ここで読者の方は次のような心配をされるかもしれない。

私が親がわりをしたら子モモンガたちが、ヒ



子モモンガたちにスポイトでミルクを与えると、ぐいぐい飲んだ。
丸１日以上水分をとっていなかったのだから当然だろう

トのニオイに慣れ（場合によってはヒトのニオイを同種のニオイとして記憶し）、〝本来のモモンガ〟になりきれないかもしれず、野生にもどれないのではないか？

もちろん私もそれを考えていた。そのうえで、大丈夫だろう、と思った。理由は「子モモンガは三匹いて、生活の大部分を一緒に過ごしているから」である。同種同士のやりとりはしっかり行なわれるからである。

加えて、巣立ち（生後二カ月半くらい）の時期までには、滑空や採餌を含め、野生で生きられるような能力は、私がつけてあげられるだろう、と思ったからである。

幼くて、それでいていたずらいっぱいの、三匹の子モモンガたちの世話は、もちろん、これまでいろんな野生鳥獣の子を育てた経験から、よくわかっていたが、……**大変だった。**

少なくとも、大学で三回くらい、家で深夜と早朝一回ずつくらい、授乳は欠かせない。

ケージの下にはホットカーペットを敷き、なかの掃除は頻繁にやった。

子モモンガたちは学習がはやく、おそらく私のニオイも覚えたのだろう。私がケージに手を入れると**われ先にとばかりに、**手に、腕に、肩に……と登ってきた。とにかくふれあいたい

のだ（と私には思えた）。

早朝や夕方などに私が声をかけながらケージの仕切りを開けてやると、三匹のいたずらっ子が巣箱から出てきて、差し出した私の手に乗ってくる（ここで誰が一番先に乗るかをめぐって一悶着ある）。そして腕をつたって（私の腕を木の枝かなにかと思っているのだろうか）、肩に乗り（ここでも場所どりをめぐって一悶着ある。押しのけられた子は背中を回って反対側の肩に移る）、**まー、一応、安定する。**三匹がそれぞれちょこんと座って落ち着くのだ。

もちろんそれで〝ふれあい〟は終わらない。

しばらくすると、私の首に体を摺り寄せてきたり、私の耳に顔を寄せて、**クッ・クッ・クッ**とさかんに鳴いたりする。時にはネコが喉を鳴

ケージの仕切りを開けると、３匹の子モモンガは巣箱から出てきて、私の手に乗り、腕をつたって肩に乗る

らすような声で鳴きつづけることがある（じつは、この声を聞いて、私のなかで、成獣同士の、ある行動の謎が氷解した！　詳しいことはまたいつか）。最後に、子モモンガたちは、私の耳たぶを両手でかきながら吸ったり軽く噛んだりして、現在の〝ふれあい〟のレパートリーはほぼ出つくしたことになる。

これらの行動は、本来は、親に対して向けられる行動なのだろうと私は推察している。最後の〝耳たぶを両手でかきながら吸ったり軽く噛んだり〟は、おそらく、母親の乳房から乳を飲むときの動作だろう。**「なんだ、乳が出ないじゃないか」**と不満に感じているかもしれない。

最近は、スギの葉も少しずつ食べるようになってきた。脳内プログラムがしっかりと展開し、おそらく（スギの葉が消化できるように）腸内細菌群も正常に変化し、刻々と〝野生〟の個体発生が進行しているのであろう。

少し遠くのものに飛びつく行動も出現してきた。頭を下げ、いかにも「距離感を測っている」ような様子で顔を左右上下に動かし（この動作は、滑空直前の成獣にも見られる動作で、違った方向から対象をとらえると距離がわかりやすいのだ）、パッと宙に舞う。

今は私に飛びついてくることが多いが、来週からは、大学林の野外ケージで、滑空の衝動を

思いっきり発散させてやろう。

このようにして、森へもどす計画は順調に進んでおり、一方で、ニホンモモンガについての学術的にもとても貴重な知見もたくさん得られている。綿密な（？）行動記録のノートは、成長するチビモモンガたちに次ぐ、**何にもかえがたい宝物である。**

さて、モモンガたちの人生（獣生）の「はじめ」はこんなところだ（その後の成長と旅立ちは次回の本でしっかり書く予定だ）。そして、本書の「はじめに」も終わりにしよう。

スギの葉も少しずつ食べるようになってきた子モモンガ。腸内細菌群もスギを消化できるように変化しつつあるのだろう

読者のみなさんには、本書が、いろいろ大変なことも多い生活のなかにあって、ポツン、と元気をくれる出来事になってくれたらとてもうれしい。

最近、ツイッターやフェイスブックで、「本、読んでいます」というコメントをくださる方がたくさんいて……、文章に親近感のようなものがまじってしまう（これは冒頭でもう言ったか）。そんなこともあって、次のようなセリフがわいてきた。

お互い大変なこともたくさんあるが、しかたのないことはしかたのないこととして胸におさめ、前を向いて進んでいきましょう。

今回も読んでいただいてありがとうございます。

二〇一九年一〇月

小林朋道